

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：
すれ違う権力のまなざしとストリートのまなざし：
社会環境を映し出す身体：見えにくい闘争の場所：
リングとしてのストリート：
化粧で武装し，化粧で紛れる人々

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉置, 育子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001236

リングとしてのストリート 化粧で武装し、化粧で紛れる人々

玉置 育子
大阪樟蔭女子大学

ストリートで化粧をすることは忌み嫌われ、問題視されることが多い。しかし、化粧を行う本人たちにとって、ストリートとは化粧法や化粧道具を披露できる場でもあり、身支度を整える仕度部屋でもあり、仕度が整うと花道にもなり、そして、数値化できないものを競うリングになる。数値化できないものを争う中で中村うさぎは「土俵から降りると自分の居場所がなくなるのではないか」、「降りると白いカラスになってしまうのではないか」と不安を語り、リングがあるから自分が存在できると語る。

しかし、誰もがリングに参戦したいわけではない。ストリートというリングで生き残る手段として顔に傷や痣を隠し、カムフラージュさせる化粧法で自分の存在をその他大勢に埋没させる、紛らわせる方法もある。

化粧は、自分の存在を紛らわせることができる隠れ蓑にもなり、生きる為の切実な手段の1つでもある。

- | | |
|----------------|--------------|
| 1 はじめに | 4 ストリートで生き残る |
| 2 ストリートで化粧 | 5 おわりに |
| 3 リングとしてのストリート | |

キーワード：化粧、化粧行為、リング、カムフラージュ

1 はじめに

多くの人が行き交い、声をかわすことはなく、人が顔をつき合わす場所であり空間、人が行き来する“公共の場”。そんな場所や空間を我々はストリートと呼ぶことが可能である。そんな“ストリート”を“化粧”と接続した時、いかなる問題が見出されるのだろうか。本論では、本研究のキーワードでもある“ストリート”を“化粧”と併せて考察することにより、“ストリート”とは何かということを定義できるのかを試みた。

2 ストリートで化粧

「電車内など人前で化粧をするのってそんなにいけないの？」と素朴な質問をすると、きっと多くの人が呆れた顔をして「あなたそんな常識すらないの？」という言葉が返され、その言葉を発する顔は“話にならないわ”という辟易した表情を醸し出すだろう。

現在社会において、多くの人々の間では公衆の面前での化粧行為は、恥ずかしい行為、してはいけない行為という意見があると同時に、若年層を中心に電車で化粧をして何が悪い、人に迷惑をかけてないからイイじゃないかという意見が対立する状態となっている。

では、一体いつから公衆の面前での化粧行為が問題視されたのであろうか。それについて苦言を呈した新聞記事を初めて確認できるのは、1999年3月5日朝日新聞の「駅で堂々化粧 今風の高校生」である。

「……駅の待合室で時間待ちをしていたら、隣の席にルーズソックスの女子高生が腰を下ろしました。……その女子高生が化粧を始めたのです。……マツゲを丁寧に整え、次はアイシャドー、最後は口紅をきれいにつけたのです。その間、数分。……そして、考えてしまいました。毎日お化粧しているのだろうか。今日は時間の都合で駅でのお化粧となったのだろうか。授業中もあのままだろうか。また、都会でも当たり前のことだろうか。公衆の面前で、臆することなくお化粧をする様子からは少女らしさは感じられません。……」（無職、野村恒子、茨城県、66歳）と、公衆の面前で臆することなく化粧をする行為に戸惑いを感じる気持ちが素直に綴られている。そして、“女子高生”というまだ大人とは言い切れない未成年が“大人顔負け”の化粧をしている姿に呆れている。化粧行為を目の当たりにすることで、子どもと思っていた高校生が化粧をすると大人びた顔に変わる。“高校生”が“高校生”でなくなった、思い込んでいた存在と目に入ってくる情報のギャップにさいなまれた様子が述べられている。

引き続き2000年8月1日読売新聞にも「恥を忘れた日本人を憂いる」と題された電車での化粧に対して苦言を呈した意見が掲載されている。

「電車の中でもものを食べたり、お化粧をしたりする光景を見るたびに苦々しい思いをする。「恥」を忘れた日本人の未来が明るいといえるだろうか。」（主婦、藤本瑛子、東京都世田谷区、59歳）電車などの公衆の面前での化粧は批判の対象とされ恥る行為であり、批判に拍車がかかる。

とにかく、目につく場所での化粧行為は忌み嫌われる。その典型が電車内化粧だ。日本電車民営鉄道協会（2005年調査実施）が行なった迷惑行為についてのランキングでは1位：座席の座り方、2位：携帯電話の使用、3位：乗車時のマナー、4位：ところ構わず電車の床に座る、5位：電車の中で騒ぐ、6位：ヘッドホンステレオの音漏れ、7位：女性の化粧という順になっている。いずれの行為も半私的空間としてのふるまいが嫌われている。とくに、人前での化粧行為は今や迷惑行為の常連といってもいいくらいだ。ちなみに、人前での化粧が忌み嫌われる理由は、化粧をしている時のにおいや髪の毛が不快、公私を考えない行為自体がみっともない、同性からみても不愉快ということであった。

更に、化粧行為は「傷害事件」に至ることさえある。「化粧注意に暴行 電車接触し

重傷」と題された詳細は次の通りである。女性がこんなところで「化粧するな」と注意をしようと肩を揺さぶった瞬間にホームに入ってきた中目黒発北先住駅行きの電車に接触させ、ろっ骨骨折などの重症を負わせた⁷⁾。被害者の女性は化粧用のスポンジで汗を拭こうとしただけだと語っている。しかし、人前で化粧道具のスポンジを扱おうとするその行為にまで、全く見ず知らずの人から風紀委員からのような視線が注がれており、化粧道具を使用する女性も他者からの視線に敏感にならなければいけないようだ。

化粧行為だけが批判の対象になるのかと思えば、そればかりではない。とにかく、女性が化粧をするとその様子がとにかく気にかかるようであり、「化粧でトイレを汚す女⁸⁾」も批判されている。公衆トイレの洗面台で女性が化粧をすると、「髪の毛、付け睫毛、色々な色の粉末、化粧品の髪の毛の箱などが水浸しになって、目を覆うばかりの惨状になっている。」と、このような状況を公共空間の私物化と嘆いている。

ストリートという多くの人が行き交う場所での化粧行為は見ている人間にとって情報のギャップが生じやすく、恥を忘れた日本人と嘆き、化粧で使用した場所の使い方は常に問題視され、賛否両論を繰り広げられる対象として話題となる。

しかし、日本においてストリートでのような公衆の面前での化粧は批判の対象にはなるが、海外では目くじらを立てて批判をするほどのことでもないようだ。

イギリスとアメリカでの記事も紹介しておきたい。

「……ロンドンの地下鉄で前は見なかった光景に出くわした。……若い女性が席に座るなりバックからマスカラを取り出し、手鏡をのぞきながら睫毛を何度もなで上げ始めた。ロンドンっ子に聞くと「電車化粧」は珍しくないそうだ。「人前で化粧するのは礼儀に反するけど、近頃みんな忙しいから。その人たちも化粧室に行く時間が無かったんでしょ。」と⁹⁾。イギリスでは批判の対象になるところか、「あっそう……」他人事として流されている。

ニューヨークでは「携帯電話のマナーは相当悪い。車内で皆ガンガンかけている。……これくらいで怒っていたら暮らしていけないのである。女性誌が「地下鉄車内でどこまで許されるの」という実験を試みた。女性コメディアンが大口を開けて歯間ブラシをやり出す。誰も注意しない。化粧を始めた。乗客はちらりとも見ない。頼んだら手鏡を出す若者もいた。電気カミソリですぬ毛を剃ってもオッケー。1人だけ「スカートをやめてパンツルックにした方がいいんじゃないの？」と忠告した男性がいた。限界のラインは髪の毛のカーラーだった。巻き始めたらみんな一斉にぎょっと引いたという……¹⁰⁾。人前での化粧について、ロンドンもニューヨークも寛大であり、タブー視する線引きが異なることがわかる。

日本では“ストリート”での化粧が問題視されるのだろうか。このように“ストリート”での化粧を忌み嫌うようになったのはなぜかを作法・マナーという言葉でキーワードに化粧史を通じて振り返ってみることとする。

まずは、作法で名高い小笠原流礼法の江戸期の伝書『女中手鑑』⁵⁾では、化粧について次のように述べられている。

まず、「今朝に及びたらんに、かならずしもその姿にて君主、父母に対面あるまじき事。対面に及ぶには、御けわい候てあるべく候。これ第一、女子の嗜たるべし。」朝起きたら、夫や家族とノーメイクで会ってはいけない。まずは化粧をしてから会うことが女の嗜みと述べている。

次に「御けわいの事。薄々とあそばされよ。殊に御鼻くちびるに御心添えられずば、見苦しきものにて候。かならずしも、はきはきと白くあるべからず。ほげやかに薄々と御ぬぐい、白じろしききわに、あかあかとあそばされ候事、さりては、公界をもご覧じなきか、または、御嗜のあしかるべきと、かたわらにて、人の沙汰し候もうたてしく、よくよく御心を添えられまいらせ候べし」化粧は薄めに、鼻や唇にポイントを置いて化粧をすればよい。白すぎる白粉は見苦しい。厚化粧は公の場で心得が無いとか、嗜みが無いと、人の噂になるのでよくよく注意しないといけないのだ。

そして、「昼の御姿。昼は御けわい改め候てよく御入候。朝より昼間での間には、かならず御けわいも散り、御髪も乱れ、見苦しきなり候。……夕べに及び候とも御髪かきなで、御まゆのちりたるをも御直し、御引き合わせをも心をそへさせられ御対面の節は、御姿見にて、御映りて候て、御出候え。」昼になると改めて化粧直しをすること。朝から昼までの間に化粧も崩れ、髪も乱れ、見苦しくなっている。夕方にも髪を梳き、眉、着崩れを鏡で確認してから夫と会うようにと述べられている。

このように“作法”と称される礼法では、化粧は人前で見せてはならない。誰に見られることもなく仕度を整え、常に身だしなみを乱すことなく整えるのが“女の嗜み”と述べている。そして、解説の箇所には「周囲への心づかいからなる自然な振る舞いができるようになると、真の美しさが備わってくる」と述べている。その場に居合わせる人が知り合いであろうと無かろうと、常に“人間”がそこに存在していることを意識し、他人への配慮が欠如している場合、お行儀が悪いとみなす風習、考え方が日本にはあるようだ。

次に、現代社会のマナー書を見てみよう。現代の働く女性に対してのマナーを指南する『あなたの「ふつう」はだいじょうぶ？ 女のマナー常識 555』⁶⁾を参照した。化粧に関するマナーは、“ノーメイクよりも薄化粧、「電車でメイク」は社会人失格”、“メイクは自宅で”、“メイクは休憩時間に”などの項目が挙げられており詳細は次の通りである。

「ノーメイクよりも薄化粧の方が“気持ち引き締まり”、オンとオフの切り替えが化粧でできる」、「電車でメイクは“社会人のマナー”として失格。」、「会社にノーメイクで駆け込んで、トイレで慌ててメイクをするのは“みっともない”。」、「基本的に仕事中のメイク直しは化粧室で、就業時間を避けて、なるべく休憩時間を利用します。……化

粧室へ行ったきりなかなかデスクに戻らないのも、仕事に支障をきたします。メイク直しは手早くすませるのも大事です。」「仕事の顔」は健康生活でキープ。疲れた表情だったり目が充血しているようでは、「仕事用の顔」として失格です。」「疲れ顔をカバーするメイク。もし目の下にクマができてしまったら、女性の場合はメイクでカバーします。」と述べられている。働く女性は、他人に化粧で“変身”するその姿を見られたくない、見せてはいけない、私はどれだけ働いても大丈夫！ 疲れなんかは顔に出ないし、目の下にクマなんかできないんです、という疲れを知らない働くロボットを演じなければならない。そして、頑張っても隠し切れない生身の人間が少しでも露呈してしまうと“みっともない”という周囲に恥をかいてしまうのだ。

礼法、マナー。言い方が変化しても述べられているのは同じ。周りの人への配慮を怠ってはならず、その際にはいうまでもなく人前で化粧は配慮を欠いた行為となる。そして、崩れた化粧は人に見せるものではなく、人目につかぬように化粧直しをしましょう。と。身支度を整える行為は人目に触れてはいけないということが大前提であった。“本当”の姿を露呈してしまうことが何よりも忌み嫌われる。

そもそも、日本文化の風習で「秘すれば華」という言葉がある。その際には、化粧行為を隠すことを“秘”としていたが、どうやら現在社会においては、会社という戦場で疲れた様子、顔を見せない。自らの顔の皮膚や目や唇など“素の自分”を隠すことも“秘”としているようだ。

しかし、このような古来の礼法や現在社会でのマナーを無視するかのようには公衆の面前での化粧行為は増える一方だ。

これらの行為に対して「公共空間である電車内でプライバシーの領域であった化粧をする現象は忙しすぎる社会土壌が育てた世相が表現されたものと捉えている」という冷静な意見もある。そして、引き続きこのような意見が添えられている。「恥じらいが無くなった。昔考えられなかった、常識をわきまえていない。マスを読者対象としたメディアで批判される。しかし、批判されている人々にはその声は届かない。自らが属するコミュニティ内での多数による批判は強く恐れるが見ず知らずの他人やその集約体は、視野に入っていないのでしょう。「恥じらい・昔・常識」は時間とともに変化していくものです。……20年程前までは、電車内で読むマンガはさんざん批判されていました。恥ずかしく無いのか、いい大人が欧米では考えられないなど。今後電車内での化粧も市民権を得てゆくのかもしれません」とくくっている⁷⁾。忙しきゆえの工夫であると同時に、コミュニティ内の秩序が優先され、見ず知らずの人の声や注意や批判は全く届かなくなっている。

通学途中の電車化粧をした経験を持つ学生にその理由を聞くと「スッピンのまま学校に行くのが恥ずかしい」という。彼女たちにとって見知らぬ人の前で化粧をするよりも、親しい友人の中で“スッピン”でいる恥ずかしさの方が比ではないという。だから、

バス、電車の中いといわず、化粧をする。どこでも化粧をしなければならないのだ。

さらに、限られたコミュニティーで生活する学生たちは食事の後の化粧直しも抜かりが無い(写真1参照)。

食堂で、昼食後一斉に化粧ポーチを取り出し、化粧直しを始めた学生たちが次のようなことを口走った。「化粧の崩れた顔で居る方が恥ずかしい」、「顔が気になって人のことどころではなくなる」と。人前で化粧をする恥ずかしさよりも、ごく限られた仲間の中での落ち度のある自分の存在を露呈することの方が彼女たちにとってウエイトが大きく、恥ずかしさに値するのだという。

引き続き同じような話だが、バスに乗っていると年齢が高校生か大学生くらいの女性が携帯電話で次のようなやり取りをしているのを目にしたことがある。

「もしもし、私今日スッピンなんだけど、周りに誰もいないから平気だよ」と喋っていた。この場合の“周りに誰もいない”というのは、“自分の周りに親しい友人知人が居ない”ということであり、見知らぬ人はもはや“人間”ではなく風景の1つと化しているのだ。仲間以外は皆、風景なのだ。

作法やマナーでは見知らぬ人でも周囲の人に対しての配慮が欠如した場合を恥とするが、化粧をする場合は自分を中心とした身近なコミュニティーの中での恥を嫌う傾向が強く、恥をかかない為の支度の1つとして、ところ構わず化粧をしてしまう。

そして、風景と化した人間として扱われた男性は一言「無視するな!」と叫んでいる⁹⁾。なぜ無視されると怒るのだろうか? こんな感情を新聞に投稿した男性はその気持ちを次のように綴っている。「電車内のケータイをかけている人、おにぎりやスナックを食べている若者、お化粧をしているご婦人。そんな車内に乗り合わせたりすると、自分のふるまいは別として、たいがいの人が不愉快になるだろう。なぜ、不愉快なのか、わからなかった。しかし、どうも同一空間にいる人間である「私」が無視されているからではないかと、考えるに至った。……無視されるということは存在否定にも等しい。」と。風景となり、物としてしか扱ってもらえないことに対して苛立ちを覚え、私たちは見ず知らずの人に対して、介入し「私」という存在を認識して欲しい衝動にかられるのだ」。

だから私たちはマナーという言葉を持ち出し、化粧を批判し、あかの他人であってもせめて、自分がそこに存在していることを認めてもらおうとするのだ⁹⁾。

“ストリート”での化粧行為は他人の存在を無視しているのだろうか。そうとは言い切れないような気がする。本来なら自分の顔の出来上がってゆく順序、方法、使用道具など、企業秘密のごとく披露することは無い。現代社会において化粧品はコンビニエンスストア、ソニープラザのようなファンシーショップ、デパートの化粧品売り場、インターネット、ダイソーのような100円均一ショップなどあらゆる場所で購入可能だ。また、数え切れない化粧品が存在し、どの化粧品とどれを組み合わせればよいのか、そこ

にはセンスと知識が必要とされる。ストリートでの化粧行為は化粧品の知識、技術を無意識に惜しみなく披露している状態なのだ。「動いている電車の中で先の尖ったコームで睫毛を梳いていた」、「揺れるバスで付け睫毛をつけていた」と、許しがたい行為を目の当たりにした人々は困惑しながら、彼女たちの妙技に見とれ、気づけば生活の中に化粧方法の発表の場である舞台が設営されていたのだった。自らの化粧法の技術、化粧品に対する知識を披露する舞台がストリートでもあるのだ。

「公共の場でお化粧するのは、大道芸を同じパフォーマンス」という意見もある¹⁰⁾。詳細は次の通りだ。「お化粧をするのは悪くないのですが、問題なのは「場所」です。……公共の場でするお化粧は「大道芸」さながらです。「すごいな」と思わせるパフォーマンスを見ている気分になります。恥ずかしさを感じることなく堂々としているところがプロのように見えてきます。……スッピンを見せたがらない女性がどうしてもたくさんの人の前でお化粧ができるのかという不自然さも考慮すると、笑いをこらえるのに必死になります。……塗りたくっている本人は、一生懸命であり、真剣な表情です。……パフォーマンスが終われば、私は投げ銭をしたくなるのでした。」と。化粧もパフォーマンスの1つと捉えている意見もある。そう考えるとストリートは舞台でもあり、誰もが化粧をすることで舞台上がって一方的に道化師のように振舞う空間となる。しかし、道化師として認識しているのは周りから見ている観客たちであり、本人が道化師になって笑われているという意識がない。ストリートは様々な行為によって空間の演出が変化するのだ。ストリートにスポットライトの無い舞台ができていたのだった。

3 リングとしてのストリート

“目力”という言葉をとにかく雑誌で頻繁に見かける。目力とは読んで字の如く、“力”のある“目”である。目力のある有名人は、歌手の浜崎あゆみを筆頭に、雑誌「Anecan」の専属モデルのエビちゃんこと蛸原友里、雑誌「小悪魔 Ageha」のモデル武藤静香なども挙げられる。彼女たちに共通しているのが、圧倒的に目が大きく、強調させている点である。目を強調させるための手早い方法として一般的に化粧が上げられる。その化粧法は、目の周りを黒いアイラインでがっつり囲み、アイシャドウで色を載せ、付け睫毛をつけ、場合によってはカラーコンタクトなどを使用する場合もある。ほんの数センチの目の周りはまさに“テンコ盛り”状態だ。

化粧を施した彼女たちの目にはどんな“力”があるのだろうか？ その“力”を得た目は若い女性たちを中心に支持され、“モテ顔”、“愛され顔”などと称され、もはや珍しい言葉ではなく、どこにでも頻繁に転がっている。さて、この化粧によって作られた目力は、一見、「愛され顔」などという受動的なフリをしているが、実際はそうでもない。その目に引き付けられ、おびき寄せられるように仕組んでいるのだ。その力の宿つ

た目は自己防衛的、受動的なふりをした“能動的”、“攻撃”が目に宿っている。つまり、男性の興味を引き付けようとする引力が生じる目と考えたい。

また“目力”とは様々な意味で解釈できる。普段から目を強調した“目力”化粧をしている学生が、目力について化粧をしながら興味深い話を語ってくれた。数センチの目の周りの化粧をするだけなのに、魂を吹き込むべく真剣に鏡の中の自分と対峙していた。その作業は手の込んだものであり、目の淵を黒いライナーで2、3mm程ラインを引き、目の周りを囲み、瞼に数色のアイシャドーを乗せ、ほかし、更に付け睫毛をつけ、最後に付け睫毛と自分の睫毛をマスカラで一緒に梳きつけていた（写真2参照）。

そして、彼女は「目に化粧をしないと、力が入らないんです。おまけに弱気になってしまって。目に化粧をするとヨッシャって感じで頑張れる。」と言う。力が、瞼やマツゲ一本一本に宿り、全身に力が漲っていくのだという。少し大げさな言い方かもしれないが体中に生命力が宿るのだという。目元の化粧は全身に力を宿らせるための「依り代」となるようだ。目力とは目から力が宿るとも言える。目の周りをガッツリと化粧が施されている状態は車で言うガソリン満タンの状態にも似ている。常にガソリンが入っていないと動けない。ガソリンの状態を確認しないと落ち着かない。だから、所構わず鏡を取り出し化粧をし、化粧直しを頻繁に行い、目を通じて力をチャージし続ける必要があるそうだ。

化粧を終えた彼女は体中に力を漲らせ、まるで花道を歩くかのごとく背筋を伸ばして悠々と消えていった。ストリートは化粧をしている最中は支度部屋になり、化粧を終えて歩くその姿には花道となる。力を得た彼女たちはストリートというリングに参戦していくのだ。

ストリートとは面白いもので、支度部屋にもあり花道にもなり、リングにもなる。それは様々な作業に応じてその空間が変容するといっても過言ではないからだ。

では、ストリートのリングの出現とはいったいということなのだろうか。

まず、雑誌などの誌面で目にする言葉で、「カワイイ」、「キレイ」、「モテ」などの言葉を頻繁に目にする。とにかく言葉が氾濫している。たとえば有名な化粧雑誌数冊の特集記事を並べても寸分たがわず「カワイイ」、「キレイ」という言葉が使われている。たとえば、「VOCE」は「これまでも、これからも日本のキレイは VOCE がつくる！」（2008年5月号、講談社）や「颯爽と、髪美人！」（6月号、講談社）。「美的」は「「NOW かわいい顔」VS「NEO かわいい顔」どっちも攻略計画！」（2008年5月号、小学館）、「ar」では「服も髪もメイクも！カワイイ変身バイブル」と。雑誌の名前に直接「キレイ」が命名されている「40代からもっとキレイ」、「「世界一の美女」になるシークレット・レッスン」（いずれも主婦と生活社）なども存在する。誌面ではそのための努力の方法、道具の使用方法、使用する化粧品の知識、技術に至るまでのノウハウを惜しみなく指南している。

しかし、一体どのような状態になれば“キレイ”、“カワイイ”のだろうか。合格点は一切誰が付けてくれるのだろうか。第1章で述べたように小さなコミュニティーで仲間意識を持つために化粧をするが、“カワイイ”、“キレイ”になった“私”を誰も確認してくれないなら、自分で確認するしかないだろう。そこで、“カワイイ”、“キレイ”になった自分を認める方法として私たちはストリートに出むくのだ。そこに存在するストリートはもはやリングと化し、数値化できないものを無言のまま闘うリングが広げられている。見ず知らずの人を見て私はあの子より「カワイイ」とか「キレイ」と心の中で叫び、勝利宣言をするのだ。あくまでも見た目という限られた情報の中で行なわれている。

そのリングで闘う様を「女性に生まれたからには、一定の年齢をこえないうちは、美の競争の土俵にいやでも乗せられています。」という（鈴木 2006）。しかし、この際の“美”、“キレイ”という言葉には一癖も二癖もある。“美”には個人の好みもあれば、時代の流行もある。正しい答えは個人によって様々であり、全てが正解、全てが不正解といっても過言ではないと思う。この際の“キレイ”、“カワイイ”、とは幻想に過ぎず、「社会の意識と自己の意識の中に作られる産物」ということができる。「キレイ」、「カワイイ」、という言葉の氾濫。これらの言葉通りの姿を手に入れた女の勝利宣言を見たことがあるか、実は私たちは日々リングの上で戦い続けるが、その中で声高らかに勝利宣言をするのだろうか、意外と無いのだ。

リングで果敢に戦い、勝利宣言をあげることなくサバイバーとして生き続ける1人の女性、中村うさぎという存在は無視できない。例えば、中村うさぎはダイエットで友達よりも一歩抜きんで行きたいと思い、友人とお茶をしても自分はコーヒーだけを飲み、ケーキを食べる友人を見て「太るがいい」と心の中でつぶやくという。そして、ニコニコとお茶をしながら「私は彼女よりマシ」と思うことで土俵の中での戦いの炎は鎮火する。このストリートに存在するリングは常に理不尽である。ケーキを食べている友人はリングに乗せられていることに気づいていないのだ。もちろん、心の中で呟く悪魔のような言葉は届かない。さらに、レフェリーや審判が居てルールへの遵守や勝敗を判断しないということだ。一方的な宣戦布告、そして、知らぬ間に土俵に乗せられて、一方的に敗北を言い渡される。まさに理不尽な異種格闘技だ。しかし、なぜに常にリングに上がり続けるのか。中村うさぎは次のように言い切る。

「……土俵から降りられなくて、土俵にいるから苦しんでいるのもわかっているのだけど土俵から下りるのが怖いんですよ。だって、土俵から降りたら、居場所がないじゃないですか。そうすると、自分がどの族にも属せなくなる。白いカラスになっちゃわないかと。」という（石井・中村 2004: 123）。しかし、本当にその戦う姿が苦しいのか？と問うと、そうでもない。「私は「土俵からおりられない私」を戯画化することで、なんとかその苦しきから逃れているわけですよ。つまり、土俵で見苦しくたたかっている

る自分を、もう一人の自分がみるという構造をつくってしまった。たたかっているのは私だけれども、それを見ているのも私。そういう分裂によって役割分担みたいなことをしたことで、ちょっと救われているとおもうんですけども」(石井・中村 2004: 124)。

リングがあるからそこに居られる。自分が存在するためにはリングが必要なのだ。

4 ストリートで生き残る

ストリートではいつ何時誰に会うかわからない。誰に出くわすかもわからない。何を見るかわからない。何かに見られるかわからない。予期せぬものを目にした時、私たちはジロジロ見るといふ好奇な視線を気づかずに送っていることもあるのだ。人の顔について同じことが言えるだろう。

石井政之氏はNPO法人ユニークフェイスの設立者、代表者であり、自らの顔の半分が単純性血管腫に覆われ赤くなっている。石井氏は自らの顔を“異形”“普通”の顔ではないと称する。そのために人生においては苦勞を強いられることもあると同時に、自分が生き残るための知恵を得てきたとも言う。そんな石井政之は、NPO法人ユニークフェイスを1999年に設立し、これまで孤立していた顔に傷や痣がある人々のセルフヘルプグループを設立した。このような団体を設立した背景には、顔に傷があるということによってストリートでは“ジロジロ”見られるという刃にも似た好奇な視線に晒されたり、人生においてははじめられたり、就職差別を受けるなどという過酷な経験があった。

ストリートでジロジロ見られるという視線から自分を守るための方法としてカムフラージュするという方法がある。顔の傷や痣などの患部を化粧でカムフラージュするのだ¹¹⁾。疾患部を隠すだけでなく、“医療の補助手段の1つ”としての認識も増えつつある。グラフィックラボラトリー内に設立されたNPO法人メディカルメイクアップアソシエーションも医療の補助手段の1つであると認識し、その理念と重要性は次のように述べられている¹²⁾。「些細な傷や痣であっても本人にとっては大変気になる症状としてとらえられることとなる。そのため、症状を隠したいという心理状態になり、さらには皮膚病変があることにより精神的負荷に陥ることになる。病的な症状を除去するための治療法の進歩があっても、完全に消去することが不可能なことも少なくない。……このような場合に、外見的に目立たなくすることも必要となる。そうすることにより日常生活に支障をきたすことを少なくし、QOLの向上が期待できるようになる。」(2007)。

実際にNPO法人メディカルメイクアップアソシエーションで施術を受けた人々の声を紹介したい。

「私がこんな身体だからいけないんだ。こんな身体じゃない。きれいな皮膚になりたい。」
「外見が普通でなければ、生きていけない」といつも叫んでいました。……「私は外見が違う

ことで命を終わらせても構わないと思うほど悩んでいました。今も悩んでいるし、病気が治ったらどんなにいいだろうと思う気持ちは変わりません。でも、今は「この病気でよかったかな」と思えるようになりました。私がこんな気持ちになれたのは、メイクとそれとおして知り合った方々のおかげです。」(NPO メディカルメイクアップアソシエーション 2007: 78)。

また、白斑の娘を持つ母親は、「自分の鞆の中から手鏡を取り出し、カバーメイクをした顔を見ては満足そうでした。その行動を横目で見ると、涙が出そう……というか、涙が出ました。」と、自分の顔を鏡で見ることは無かった娘が、自らの顔を鏡で確認し、満足する姿はその母子にとって希望を与えてくれた瞬間を味わえたのだ。更にこの母親は以下のように述べている。「カバーメイクは病気の治療につながるとは思いませんが、皮膚の病気を抱えている患者さんや、その家族にも精神的な面で大きな支えとなり、明るく病気と付き合える1つの医療行為になると確信しています。」(NPO メディカルメイクアップアソシエーション 2007: 92) と、疾患部のカムフラージュが顔だけの問題ではなく、精神的な問題においても支えとなり、明るくなれる手段の1つだと重要性を説いている。

化粧だからといって女性に限るものではない。宮崎県日南市の薬剤師、平林誠一氏は、2006年に4月に左頬にできた口腔内上皮癌を取り除き、自身の胸の肉と皮膚を移植。移植した直径5センチほどの円形部分だけがパッチワークのように白っぽく浮き出て見えるのが悩みだったという。その患部にファンデーションを塗り、周りの肌色を殆ど違わなくなった。その様子を見て本人は「他人に対して自分の状況を説明する必要がなくなり気持ちが随分楽になった」と述べている¹³⁾。

カムフラージュメイクなどの類の化粧をすることで踏み出せなかった一歩を踏み出し、前を向いて歩けるよう元気つけてくれることも可能であり、悪気のない素朴な疑問に対応しなければならない手間も省けるようだ。

しかし、傷や痣を隠せば問題は解消されるのだろうか。そうではないようだ。カムフラージュメイクによって救われたとともに、カムフラージュメイクで隠し続けたいといけないという母親の葛藤が次のように綴られている。

「カバーマークと一般の化粧品を上手に使うと、他人が見ても母斑があることは全然わからないほどきれいにお化粧できるようになり、母親としてはほっとしていました。しかし、反面、あるがままの素顔の自分を知ってもらえないもどかしさと、カバーマークで隠さなければならない現実との複雑な思い……」(NPO メディカルメイクアップアソシエーション 2007: 95)。

近年メディアを通じて化粧の有効性、可能性を知る機会は増えており、様々な医療現場でも化粧の必要性を提唱する医療関係者が少しずつでも増えてきている。しかし、化粧は万能ではないということ、カムフラージュメイクを必要としている人たちの声が現場に届きにくいという状況や、技術者と施術者との間にイメージのギャップが生じるな

ど様々問題を抱えており、化粧の持つ危険性について言及している発言はあまりにも少なすぎる。

化粧の問題を指摘するのは先述のNPO法人ユニークフェイス代表の石井氏である。

まず、カムフラージュメイクをはじめとするこの類の化粧のレッスン代に実際に顔に傷や痣がある当事者が参加するケースが少なく、実際に臨床現場での訓練がしにくいということが挙げられる¹⁰。筆者自身もユニークフェイス主催の「メイク塾」と称したカムフラージュメイクの研究会に出席したことがある（写真3、写真4参照）。

その研究会でカムフラージュメイクのモデル石井氏が務め、その様子は『見た目依存の時代』にも述べられているが本論でも少し触れておきたい。

まず、その研究会で求められた化粧法は多くの女性が日常行なってきた化粧とは全くかけ離れたものがあった。「顔の右半分にある赤アザをメイクで隠し、左側の健康な皮膚と同じような色合いでメイクをしてほしい。左側の健康な皮膚にメイクをしないで欲しい」という要望だった。顔を半分だけ化粧をすることは多くの女性は日常生活での経験は皆無であろう。また、日常生活で女性が毎日行なう化粧はクマ、シミ、毛穴などを隠し、ツルツル、すべすべとした“ナチュラル”という名の“人工的な肌”を作りこんでいる。しかし、「メイク塾」では上記のような要望は1つも出ていない。そして、最も施術者が驚愕していた要望が“顔を汚して欲しい”と言われたときだった。モデルの石井の顔半分の単純性血管腫の箇所だけを化粧で隠すわけであるから、化粧をしている顔と化粧をしていない顔をバランスよく整えなければならない。そうになると、キレイな肌ではなく、本来ある肌の再現作業ということにある。だから、“自然”にある目の下のクマも“人工的”に化粧品を用いて“自然”に見えるよう化粧を施してほしいという注文があったのだ。

次に、施術終了後のコミュニケーションにも注意を促す必要が述べられていた。「カムフラージュメイクが終わった後に、自分のイメージ通りのメイクになっていないのに、きれいになりましたね、メイク担当者にいわれてしまって傷ついた。」（石井・石田2005: 195）という意見が実際に多いらしい。このような言葉をかけられると本来のアザのある顔が不愉快だったのか、キレイじゃないのか、隠さなければならないのか、という不安感を持たせてしまうこともある。

また、実際の施術の際にはカバー力が必要とされる痣を隠す作業に執着し、厚ぼったくファンデーションを塗ってしまうこともあるという。しかし、ファンデーションは、蛍光灯、白熱灯、太陽の光の下では皮膚の色や質感が全く異なって見える。「化粧で痣を隠すことはできる。しかし、化粧は万能ではない。限界があるということを知ることが重要だ。」モデルとなった石井氏が提唱した言葉の1つであった。

化粧で痣を隠すことで、心が軽くなることもあるが、全てに万能ではない。しかし、ストリートでは、何に出くわすかわからない。何があるかわからない。いつ何時晒され

るであろう「ジロジロ見る」視線を防御するために“着用”化粧で“武装”する。戦わず紛れ込むという知恵も必要なのだ¹⁵⁾。

5 おわりに

化粧とは面白いもので公衆の面前で行なうと嫌がられ、小さなコミュニティーでは仲間であろうとするために必要とされ、化粧をした姿をストリートで競い、化粧によってストリートに紛れ込むこともできるのだ。

化粧で「隠し」、「現す」。この相反する行為が意味しているのは自らの身体の欠点を隠すために化粧をするということだ。まさに「全ての人は何らかのコンプレックスをもっている。その欠陥を埋めるためにメイクをする」(石井 2004) 私たちは自分の気づかぬコンプレックスの溝をほんの少し埋めた時に「キレイ」、「カワイイ」、という抽象的な表現の上に立ち、リングに参戦しているのだらう。

第3章で述べた化粧で紛れるというのは、ユニークフェイスのような顔に傷や痣がある人ばかりではなく、現代社会を生きる我々全てに通じるであろう。

ある学生から興味深い話を聞いたことがあるのでここで紹介しておきたい。

その学生は入学式では友達を作らないという。「どうして?」と聞くと、「その人のファッションの好みが見えないから。」という。詳しく話を聞くと以下の通りだ。

「入学式は皆同じ黒か紺のスーツを着ているし、お化粧もスーツに合わせて控えめ。そこでたまたま隣に居合わせた子と友達になって、翌日普段着での登校になって自分の好みと全く違うファッションだったりするとありえない。同じようなファッションとのみ仲良くしたい」という。

彼女にとって同じファッション、同じような化粧を施した子が友達になれるという。

言い換えれば、全くファッションセンスと違う子とは友達にできない、友達になりたくないのだという。共通の服の趣味を持ち、同じような化粧をしていることで、同じ体温を共有し、自分の居場所を確保し、身を守り、紛らわすことができるのだという。ファッションや化粧が自分の存在を紛らわす迷彩服化しているのだ。

化粧は、自分を武装させ、自分の存在を紛らわすことができる隠れ蓑にもなり、仲間の証であり、生き残ろうとする際の切実な手段でもあり、人前で披露したり、力を漲らせたり、キレイ・カワイイを競い合うのだ。ストリートはリングのように闘う場でもあり、生きる場でもある。そして、化粧はそのストリートに居続けるための戦闘服である。私たちは現代社会のサバイバーなのだ。

最近、ストリートで黒い小さなゴミが落ちているのを頻繁に見かけるようになった。よく見ると「付け睫毛」である。きっと糊が落ちたために瞼から落ちてしまったのであろう。

その「付け睫毛」はストリートという戦場で力尽きた戦闘服のように見えてくる。その「付け睫毛」はまるで「兵どもが夢の後」と語っているようだ。

注

- 1) 日本経済新聞 2005年4月28日。
- 2) 日本経済新聞 2001年12月29日。
- 3) 朝日新聞 2001年6月7日。
- 4) 朝日新聞 2002年3月28日。
- 5) 『小笠原流礼法入門 美しいふるまい』小笠原敬承斎，淡交社，1999年。
- 6) 幸運者編 2006年。
- 7) live door news 2006年8月4日 (<http://news.livedoor.com/article/detail/2278590>)。
- 8) 日本経済新聞 2007年3月31日。
- 9) 人前での化粧行為については『平然と車内で化粧する脳』（2000年，扶桑社）で著者の沢口俊之，南しんぼうは，理性を抑えられない行為を前頭葉の未発達であると指摘をしている。また，竹内久美子は『小アゴ，小顔，プルプル唇——「私が答えます」(2)』（2002年，文藝春秋）で，動物行動学的視点から人前での化粧行為を分析し，エストロゲンが高いというセックスアピールにつながると指摘をしている。そして，『電車の中で化粧をする女たち——コスメフリークというオタク』（2006年，ベストセラーズ）では，1980年代以降に化粧そのものが変わったと指摘をする。それは化粧がうまいのは褒め言葉であり，化粧は自己表現であり，立派な趣味の一領域であり，教養ですらあると指摘する。意のままに外見を操れる女性は「ビューテリジェンス」の持ち主として賞賛される。そんなコスメフリークと称される女性たちが人前で他者の視線をものともせず，マスカラや口紅を塗ることができるのは，コスメフリークが現実よりも“自分”というフィギュアに萌え，虚構の世界に生きていることの証であると述べている。
- 10) 悩み解決&幸せ生活向上サイト Happy-Lifestyle 仕事 社会人としての仕事マナー（身だしなみ編）(<http://www.happy-life.com>)。
- 11) 顔に傷やあざのある人に施す化粧には，メディカルメイク，セラピーメイク，カバーメイク，リハビリメイク[®]などがあるが，本論では全世界で通用するカモフラージュメイクという表現を用いる。カモフラージュメイクとは，イギリスの赤十字社が用いた表現方法である。
- 12) 化粧の施術を行う人間を，NPO メディカルメイクアップアソシエーションでは，サポーターと呼んでいる。当事者の方々をサポートすることに起因している。サポーターはメディカルメイクの技術を修得し，当事者の相談にのり，地味な作業に真摯に取り組む精神の安定が必要とされ，冷静に対応し，同情だけでは人は救えないということを理解しなければならない。そして，守秘義務を守ることが要求される。
- 13) 日本経済新聞 2008年1月19日。
- 14) 石井氏はユニークフェイス研究所を設立し，自らが化粧のレッスン台になり，技術の向上に貢献しようとしている。
- 15) 石井氏は普段からカムフラージュメイクを施すことはないという。自分の顔は顔の半分が単純性血管腫で覆われており，それが自分のアイデンティティーである。隠す必要はない，との理由から日常生活では化粧を施してはいない。

文 献

相原博之

2007 『キャラ化するニッポン』 講談社。

阿部 潔

2006 『空間管理社会——監視と自由のパラドックス』 新曜社。

石井政之・石田かおり

2005 『「見た目」依存の時代——「美」という抑圧が階層化社会に拍車を掛ける』 原書房。

NPO 法人 メディカルメイクアップアソシエーション

2007 『メディカルメイクのすべて』 青海社。

小笠原敬承斎

1999 『小笠原流礼法入門 美しいふるまい』 淡交社。

ゴッフマン, E.

1974 『行為と演技』 石橋毅訳, 誠信書房。

佐山半七丸

1982 『都風俗化粧伝』 平凡社 (初出は 1813 年)。

鈴木由加里

2006 『人は見た目が 10 割』 平凡社。

中村うさぎ・石井政之

2004 『自分の顔が許せない』 平凡社。

中村うさぎ

2005 『美人とは何か——美意識過剰スパイラル』 文芸社。

ベネディクト, R.

1967 『菊と刀』 長谷川松治訳, 世界思想社。

米澤 泉

2005 『電車の中で化粧をする女たち——コスメフリークというオタク』 ベストセラーズ。



写真1 昼食後に化粧をする学生



写真2 目力化粧：魂を吹き込む化粧



写真3 カムフラージュメイクの施術を受ける石井氏



写真4 メイク終了後の石井氏の顔

